

# 幼児期におけるスペースボールの活用について

石 岡 由 紀

## 1. はじめに

最近の幼児教育もしくは早期教育は従来からいわれていたピアノや絵画教室に代表されるお稽古事に始まり、無藤（1998）が学校教育の先取りという意味で典型的な早期教育であると述べている読み書き・算数塾さらに英語塾などの隆盛に見られる。その一方で、少子化が問題とされている我が国において、「それを売り物にする企業論理に対して危機感を覚える者は少なくない（野村2001）」という指摘も見られる。都市化による遊び場の減少、インターネットの普及や塾通いなどにより、子どもの遊び場が変化し、戸外で集団的に遊ぶことが少なくなっている中、スイミングや体育教室などに代表されるスポーツ事業の参入も忘れてはならないものの一つといえよう。以前は子どもたちの群れの中でなされていた遊びの中で自然と培われていた運動能力やコミュニケーション能力の増進は今や、その遊びが姿を消してしまったといわれる現在の状況においては、もはや大人が適切な環境整備を行い、その導入または指導にいたるまでの介入をする必要性があると考えられている。代表的なものとして世田谷区では、平成7年度から区立小学校を利用して、児童の健全育成を目的として、放課後も引き続き子どもたちに「遊び場」を提供しようとする試みがなされている（藤川2005）。また現在、幼児期における集団参加のあり方や社会性を培うことが苦手とされる子どもたちのことが問題となることが多くなっている。これはもちろん広汎性発達障害を中心とする子どもの問題などを無視し、子どもを十把ひとからげにして語られるべき問題ではないということを念頭に置き議論されるべき必要があるのだが、この問題はまた別稿にて述べることとする。つまり、以前のように子どもが群れの中で成長する環境が激減している現在において幼稚園教諭ならびに保育士を中心とする保育者は子どもの発達に応じた遊びの提供をするための環境作りをする知識と技術が求められているのである。

そこで、本稿においては幼児期における集団遊びの一つとしてのスペースボールの活用についてその目的と方法について述べることとする。

スペースボールはNPO法人SCIXが開発したオリジナルスポーツである。NPO法人SCIXとは神戸製鋼ラグビー部を中心としたグループであり、本学ともパートナーシップ協定を締結している。またスペースボール普及に関してはSCIXと体育科スポーツ授業内容研究会が提携

し平成15年度の文部科学省による教育情報共有化促進モデル事業の支援を受けて産学連携による体育科授業用コンテンツの開発に取り組んでいる。スペースボールに関しては同研究会が開発した「楯円球を使った新しい体育科授業について考える WEB サイト (<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h15SpaceB/>)」を参考されたい。

## 2. スペースボールとは

スペースボールとは上記したように、NPO 法人 SCIX が開発したオリジナルスポーツである。サッカー、ラグビー、バスケットボール、アメリカンフットボールなどのゴール型球技に共通する概念である「スペースを学ぶ」ゲームであり、そこで必要とされる「広い視野」「コミュニケーション」「状況判断」を養うことを目的としている。

まずベーシックルールがあり、それを基本にサッカールール、2回タッチルール、両手タッチルールなどが考案されている。ゲームにはラグビーボールを使用するのであるが、普段使用しているボールとは違うその動きの意外性が敏捷性や判断能力を養うことにつながるものと考えられる。

### (1) ベーシックルール

- ①プレーの開始はセンターライン中央で審判がトスをあげ、両チームの代表1名がボールをタップする。タップ後のボールを先にとった方が攻撃権を得る。攻撃側のチームはその位置から見て、遠い方のゴールラインが攻撃方向となる。
- ②ボールをとったプレーヤーはその位置からバックパスを行う。その間守備側のプレーヤーはバックパスを行う攻撃側のプレーヤーに対して、バックパスの妨害をしてはいけない。
- ③バックパスを受けたプレーヤーはパスで攻撃を開始する。また審判の「Go!」の合図があれば、ランもできるようになる。守備側のプレーヤーは攻撃側のバックパスを受けたプレーヤーに対して3メートル以上離れなければならない。
- ④バックパスを受けたプレーヤーから、次にパスを受けるプレーヤーは、ランまたはパスで自由にボールを運んでいくことができる。以後のプレーヤーも同様。その際ボールを落としてはいけない。ボールを持ったプレーヤーまたはボールがサイドラインの外に出た場合、最後にボールに触ったプレーヤーと反対側のチームに攻撃権が移る。
- ⑤守備側のプレーヤーは、ボールを持っている相手側のプレーヤーに片手でタッチする。タッチされると、攻撃権が相手チームに移転し、その位置からバックパスでゲームが再開される。
- ⑥味方プレーヤーにパスをした時、そのボールを守備側のプレーヤーにカットされてボールが地面に落ちた場合、直ちに攻撃権が相手チームに移転し、その位置からバックパスでゲームが再開される。
- ⑦味方プレーヤーにパスをした時、そのボールを守備側のプレーヤーにカットされてボール

が空中に浮き、地面に落ちる前に味方プレーヤーがキャッチした場合、攻撃権はそのまま継続される。

⑧味方プレーヤーにパスをした時、そのボールを守備側のプレーヤーにカットされてボールが空中に浮き、地面に落ちる前に相手チームプレーヤーがキャッチした場合、直ちに攻撃権が相手側チームに移転するが、この場合相手チームはバックパスをせずに、同方向へすぐに攻撃を開始することができる。

⑨攻撃側のプレーヤーが相手のゴールラインにボールを運び込めば得点となる。

⑩得点後、そのプレーヤーが起点となり、反対側のゴールラインに向かって攻撃を開始する。インゴール内であれば自由に移動することができ、パスで攻撃を開始する。また審判の「Go!」の合図があれば、インゴール外へランすることができるようになる。守備側のプレーヤーはインゴール内にあるボールを持ったプレーヤーにタッチすることはできない。

## (2) サッカールール

①ボールを落とした場合でも、攻撃権は移らず、そのまま蹴ってボールを運ぶことができるようになる。

## (3) 2回タッチルール

①攻撃権の移転について、守備側のタッチ（一人目）では移らず、他のプレーヤーのタッチ（二人目）で移るようになる。

## (4) 両手タッチルール

①攻撃権の移転について、片手タッチではなくて、両手タッチしなければ、攻撃権を移転させることができなくなる。

## 3. 幼稚園・保育所におけるスペースボール導入のための保育案

### (1) ボールに慣れよう①

目的：ラグビーボールを使って準備運動をすることにより、ラグビーボールに慣れる。

所要時間	内容	保育者の配慮	準備するもの
10分	4グループに分かれて整列する ボールを持って上半身をねじり（足は定着させたまま）、後方の子どもにボールを送る 最後の子どもにボールが送り終わったらグループ全員がすわる 反対の方向に上半身をねじり、後方の子どもにボールを送る 最後の子どもにボールが送り終わったらグループ全員がすわる	整列しやすいようにフラッグコーンを用意しておく 子どもと子どもの距離は適切であるか確認する 足は定着したままで上半身だけをねじっているか確認する 送り終わったらすぐに座れるよう他の子どもの動きの観察をしておくよう声をかける 子どもと子どもの距離は適切であるか確認する 送り終わったらすぐに座れるよう他の子どもの動きの観察をしておくよう	フラッグコーン ラグビーボール

上半身をまっすぐ後方にそらしボールを後方の子どもに送る 最後の子どもにボールが送り終わったらグループ全員がすわる	声をかける 子どもと子どもの距離は適切であるか確認する 送り終わったらすぐに座れるよう他の子どもの動きの観察をしておくよう声をかける	
上半身を前方に折り、股の下からボールを後方の子どもに送る 最後の子どもにボールが送り終わったらグループ全員がすわる	子どもと子どもの距離は適切であるか確認する 送り終わったらすぐに座れるよう他の子どもの動きの観察をしておくよう声をかける	

## (2) ボールに慣れよう②

目的：ラグビーボールの動きを知り、その動きを楽しむ。

所要時間	内容	保育者の配慮	準備するもの
10分	4グループに分かれて整列する  保育者が投げたボールを走って捕りにいく 4人のうち誰かがボールを捕ったら元の場所に帰ってくる	整列しやすいようにフラッグコーンを用意しておく ボールは予想外の方向に転んでいくことを認識させる	フラッグコーン  ラグビーボール

## (3) ボールをもらったら走ろう

目的：ボールを持った者がゴール地点に入ると点数になるという基本を知る。

所要時間	内容	保育者の配慮	準備するもの
10分	2グループに分かれて整列する  保育者からボールをもらいボールを捕ったらゴール地点まで走る 走り終わったらゴール地点で座って待つ 保育者との距離を離し投げられたボールを捕り、捕ったらゴール地点まで走る	整列しやすいようにフラッグコーンを並べておく キャッチしやすいようにボールを渡す  整列しやすいようにフラッグコーンを並べておく キャッチしやすいようにボールを渡す	フラッグコーン  ラグビーボール

## (4) 敵が近づいてきたら逃げよう

目的：敵が近づいたらあいているスペースを探して逃げるという感覚を身に付ける。

所要時間	内容	保育者の配慮	準備するもの
10分	2つのグループにわかれて整列する 保育者からボールをもらいボールを捕ったら走る 敵（保育者B）が近づいてきた	整列しやすいようにフラッグコーンを並べておく キャッチしやすいようにボールを渡す 保育者Bは子どもが逃げることで	フラッグコーン  ラグビーボール  保育者B

らあいているスペースを探して逃げながらゴール地点まで走る 敵にタッチされたら、ボールを放し敵にボールを渡す	きるスペースを確保しておく タッチされたらボールを渡し、その場で動きが停止することを伝える
--	--

#### (5) 敵が近づいてきたら味方にパスをしよう

目的：敵が近づいたら味方を見つけてパスをするという感覚ならびに、味方にボールをパスしてもらえるスペースに移動するという感覚を身に付ける。

所要時間	内容	保育者の配慮	準備するもの
	2人組になって整列する  1人の子どもが保育者からボールをもらいボールを捕ったら走る もう1人はボールを持っている子どもからパスをもらえるように敵に邪魔をされないスペースを見つけて走る 敵（保育者B）が近づいてきたら、味方にパスをする 敵にタッチされたら、ボールを放し敵にボールを渡す	整列しやすいようにフラッグコーンを並べておく キャッチしやすいようにボールを渡す  ボールを持っている子どもに近づき、もう1人の子どもにパスをすることができるスペースを作る タッチされたらボールを渡し、その場で動きが停止することを伝える	フラッグコーン  ラグビーボール  保育者B

#### 4. 今後の展望と課題

スペースボールは、主に小学生以上を対象に開発されたスポーツである。しかし、ベーシックルール以外にサッカールール、2回タッチルール、両手タッチルールなどを工夫ならびに応用することによって、広い年齢層を対象として楽しむことができるスポーツであるといえる。またスペースボール開発の目的の一つであるゴール型球技に共通する概念である「スペースを学ぶ」ゲームとしてそこで必要とされる「広い視野」「コミュニケーション」「状況判断能力」を養うことができるスポーツとして活用することが可能であろう。本稿においては、幼児期におけるスペースボールの活用についてその参考例を提示してきた。まずボールに慣れるためにボールを使って準備体操を行うことによって、楽しみながらボールを持つ感覚を養うこと、またラグビーボールの予想外な動きに反応することによって、敏捷性のみならず、ボールを近視眼的に見るのではなく、予想外の動きをすることを頭に置きその動きに反応するための状況判断能力を培うことができるものと考えられる。次に得点をするためにはボールを持った者がゴールラインにボールを運び込むことが最大課題であり、そのために必要な「走る」という粗大運動能力ならびに人がいないところを選んで走るという広い視野または状況判断能力が培われるものと考えられる。さらに、敵が向って来た時に、このままボールを持って走ることができる

かまたは味方にパスをした方が得策であるのかという瞬時の状況判断能力を養うことも可能であろう。その一方でパスされる方も敵に邪魔をされないスペースに移動することが求められるため、広い視野を持って状況判断をする必要性が出てくるのである。またパスをするにあたってはお互いの存在を意識し、味方にボールをつなぐという経験から1人ではできないこともチームが協力をすれば得点につながるという経験を増やしていくことでコミュニケーション能力を身に付けることも可能であろう。今回紹介した運動例は、幼児期の子どもにとって技術的にも運動発達のにも無理のないものである。これら基本的な運動の継続、発展がスペースボールゲームに展開していくのであれば、楽しみながら体力増進、もしくは集団活動の活性化が期待される。さらに、スペースボールには絶対的なルールがないので、ボールとプレーする場所さえあればできることなども含め、幼児期におけるボール運動の1素材としてスペースボールの導入が有効であると考えられる。

今後は、スペースボールゲームを展開するにあたってのキッズルール（仮称）を考案し、幼児期におけるスペースボールの普及活動を行っていく所存である。そのためには児童教育学科に在籍する本学の学生を中心にスペースボールのルール理解または指導者としての知識および技術の向上が求められるところである。

#### 参考文献

- 藤川恭英「子どもの放課後健全育成と子育て過程支援の融合」発達 No. 104, Vol. 126 2005  
江部宏典ら「産学連携による体育科授業用コンテンツの開発」日本教育工学会論文誌 2004  
野村進『脳を知りたい!』新潮社 2001  
杉原隆編『保育内容「健康」』ミネルヴァ書房 2001  
無藤隆『早期教育を考える』NHK ブックス 1998  
大場牧夫『幼児教育の基本を考える』ひかりのくに株式会社 1988